

2012年8月14日・東京新聞「文化」欄では

「脱原発」世界に発信

国内外 218 人の詩集 英訳付きで刊行

原発に関わる詩を集めたアンソロジー『脱原発・自然エネルギー 218 人詩集』（コールサック社）が刊行された。英訳付きで、「脱原発」の思想を世界に発信することを目指している。

同社は『原爆詩一八一人集』（二〇〇七年）、『鎮魂詩四〇四人集』（一〇年）などを編集する過程で、原発に触れた詩が少なくないことに気づき、一〇年秋の段階で次のアンソロジーのテーマに「脱原発」を考えていたという。

東日本大震災前に原発に対する危機意識を表した作品をはじめ、国内外の詩人が新たにつくった詩を集め、十一章に分けて紹介している。

第一章の「予知されていた悲劇」には、震災前の作品を掲載。福島県南相馬市に住む若松丈太郎さんの「神隠しされた街」（一九九三年）はチェルノブイリを視察した経験をもとに、原発事故で自分の街から人がいなくなる光景を描いた。震災後に「福島原発事故を予言していた詩」として話題になった作品だ。ゲーリー・スナイダーの「夜話^{よぼなし}」（二〇〇九年）は自然エネルギーを使った暮らしを描き、「夜話に、そんなに強い光はいらない」と締めくくる。

このほか、福島以外の原発立地地域に住む詩人たちや、福島に寄せる海外詩人の作品などを載せた。音楽家の坂本龍一さんが序文を寄せている。

同社の鈴木比佐雄さんは「原発事故に対して傍観する人たちの心を変える力が、詩にはあると思う」と話している。（石井敬）

と紹介されています。